

日本で音楽をする意味～生活と共にある音楽文化～

東京混声合唱団
参与 村上 満志

実演奏によるご挨拶

私は東京混声合唱団の運営に携わっておりますので、合唱団のソプラノ歌手 大沢結衣さん、ピアノ演奏は山口佳子さんにお手伝いいただき、ご挨拶代わりの音楽をお届けしたいと思います。

・1曲目は、作曲家カッチーニのアヴェマリア。この曲は通常、独奏で演奏されることが多いですが、今日はコントラバスだけでは物足りないため、そこに素晴らしいソプラノのオブリガートを加えてお届けします。

☆オブリガート：独奏または独唱部の効果を高めるため、伴奏楽器で奏される主旋律と相競うように奏される助奏。(デジタル大辞泉)



・2曲目は「鳥の歌」カタルーニア民謡。20世紀のスペインの名チェリスト パブロ・カザロフさんがカタロニア地方の民謡を自分なりに編曲されて、鳥はピース、Pieceと鳴くと言って1971年に、ニューヨークの国連と、ワシントンのホワイトハウスでこの曲を演奏され平和を祈られたという曲です。今日はこれだけたくさんの方にお集りいただきましたので、皆さんの明日の幸せに3人でこの曲をお届けします。

参考：1971年国連での演奏動画が見られます

<https://www.youtube.com/watch?v=ZGvH4qG50XU>

1：はじめに

「日本で音楽をする意味、生活と共にある音楽文化」というタイトルをつけさせていただきましたのは、私自身が演奏家として歩んできた道を振り返り、その中で得た経験をお話したいと思ったからです。1974年に東京都交響楽団に入団し、そこで音楽家として多くのご縁をいただきました。その後、2001年からは仙台フィルハーモニー管弦楽団で活動し、2011年12月31日までコントラバス演奏者として演奏してまいりました。そして、2012年からは同楽団の運営に携わることになりました。楽器を弾いていた38年間、演奏団体の運営に5年間携わってのち、現在は26名のメンバーで活動するプロフェッショナル合唱団、東京混声合唱団の運営に携わっています。

演奏家目線でのお話ですので、系統だった話にはならないと思いますが、これまで私が見てきたこと、感じたことを少しでも分かり易くお伝えできればと思っております。どうぞお付き合いいただければ幸いです。

2：自己紹介

2-a：楽器をもったきっかけ

☆中学時代の恩師との出会い

1948年生まれですので、今日お集まりいただいた方々の中には、私と同年代の方が多くいらっしゃるかと思います。私が初めて楽器を手にしたのは中学生の頃です。当時、弦楽器を演奏することは、今ほど一般的ではない時代でしたが、私の中学校には弦楽器のクラブがあったのです。これは非常に珍しいことだったと思います。クラブの指導をしていたのは、バイオリンの先生でした。多くの学校では吹奏楽が盛んだった時代ですので、その中で弦楽器クラブがあったのは本当に特別でしたし、私にとっては幸運なことでした。

私は管楽器が苦手でした。中学校に上がる前、家には父親が使わなくなった弦が切れたギターがあったのでそれを弾いて遊んでいましたが、中学校に弦楽器のクラブがあったこと、そして、その先生に出会えたことは、私にとって非常に大きな出来事でした。

中学校を卒業後、高校には弦楽クラブがなかったため、自分でクラシックギターを演奏していました。その頃、周りの友人たちが次第に大学進学を目指すようになり、私も同じように大学進学を考えましたが、出来れば音楽の道に進みたいと思い、中学校でお世話になった先生に相談に伺いました。中学校時代は、弦楽クラブでチェロとコントラバスを弾いていましたが、先生から「チェロはもう遅い、大きな楽器ならまだ可能性があるかもしれない」ということで、コントラバスを勧められ、そこから本格的にコントラバスの勉強を始めることになりました。

音楽大学の入試では、副科ピアノとソルフェージュ（音感教育）、すなわち楽譜通りに歌う訓練が必要でした。その中学校の先生はバイオリンが専門でしたので、コントラバスの指導をしてくださる先生を紹介してくださり、副科ピアノとソルフェージュのレッスンはその先生に教えて頂きました。先生は私の家の経済的な事情を良くご存知で、ピアノとソルフェージュの練習を無償で1年半にわたって指導してくださいました。

先生との出会いは、私にとって非常に大切なものであったと感じております。そして、この後のお話にも関わることですが、先生との出会いが私の人生にとって大きな意味を持つものであったと考えています。

2-b：島根大学時代

☆パラダイスな大学生活

中学時代の先生のお力添えで、私は島根大学教育学部に入学することができました。当時、各地方では文部省が音楽や体育、美術の教員を多く育成する必要があるとの方針で、特設課程が設けられていました。中国地方においては、島根大学がその役割を担い、1学年30人（男性10人、女性20人）の学生が在籍していました。

私は高校時代、男子校に通っていましたが、それは奨学金を得るためには男子校しか選択肢がなかったためです。大学に入り、自分の生活環境に2対1の割合で女性がいるという状況は、大変幸福感に満ちた時間であり、高校時代あまり好んで勉強をするタイプではなかった私にとっては、勉学ではなく、コントラバスを練習することで、少し大袈裟に言えば、自分が生きていることを許されたような思いがあり、まさにパラダイスのような4年間を過ごしました。

もちろん、常に練習を誰かに聞いてもらっていたわけではありませんが、自分が練習をする環境に女性がいるという事実は私にとって音楽をする根源的な力となっていたと思います。例えることも僭越ですが、ベートーヴェンやブラームスそしてモーツァルトも、と言うよりほとんど全ての作曲家が素晴らしい作品を残した陰には異性に対する思いがあったと言っても過言ではないと思います。

☆大学で生徒を思いやる心を授けられた

島根大学ではコントラバスを専攻していましたが、指導して下さった先生はオーボエの先生でした。しかし、私は全く不満を感じませんでした。なぜなら、その先生は私のことを非常に気にかけて下さっていたからです。演奏技術を直接教えることはできないものの、田舎の大学にコントラバス専攻生が入学したことで、学校の費用で楽器を購入して下さるなど、大変心のこもった対応をして下さいました。要するに、教育の場において求められるのは、技術や知識を教えることにもまして、まず生徒を思いやる心が何よりも大切であることを、教わる立場で感じたのだと思います。その後、私が名古屋の愛知県立芸術大学や私立の音楽大学でコントラバスを教える立場になったとき、最も大切なことが何であるかを、オーボエの先生から教えて頂いたと思っています。オーボエの先生でありながら、私にコントラバスを教えて下さった先生のご恩は大きなものでした。

☆またまた恩師との出会い

とはいえ、コントラバスを専門に教えて下さる方がいない中で、どのように勉強すべきかと悩んではいました。高校時代、広島で行われたNHK交響楽団の演奏会に行った際、演奏後に楽屋でコントラバス奏者にサインをいただいたことを覚えており、無謀にも島根大学のある、松江市の下宿からその方に手紙を送りました。当時、携帯電話は存在せず、市外通話は非常に高価でしたが、その先生は私の手紙の住所を調べ、東京から市外電話をかけて下さいました。この出来事に私は大変感激しました。その方との出会いは、私の人生において非常に大きな転機となったのです。

私は島根県の松江から夜行列車で東京へ通い、その方にレッスンを受けました。初めてコントラバスの演奏技術を学んだときの衝撃は、まさに「目から鱗が落ちる」思いでした。3～4ヶ月に一度のレッスンと、松江で自主練習を重ねましたが、レッスンに通うための資金を稼ぐことは容易ではありませんでした。当時、どこの街にもキャバレーと言う社交場があり、そのキャバレーにはバンドは付きものでした。大学のピアノ専攻の先輩からピアノトリオのコントラバス奏者として誘われ、東京にレッスンを受けに行く資金を稼ぐために、そのバンドに参加しました。まだカラオケがなかった時代ですから、お客様が歌う際には伴奏をし、休憩時間には自分たちの好きなジャズを少し演奏する、という形で每晚活動していました。給料は3万円より少し多かったと思います。当時、大学に新任で赴任した助手の先生よりも数千円高かったのです。毎日、大学とキャバレーの掛け持ちは大変でしたが、大学の先生よりも少し高い給料を得たことは誇らしくもありました。

☆音楽家への覚悟の決断

パラダイスのような4年間を過ごしていましたが、4年生になると教育学部であるため、周りの学生たちは教員採用試験を受けて教師への道を進んでいました。しかし、私自身はその道に進む気持ちにはなれず、音楽の演奏を続けるにはどうすればよいかを考えました。そして、東京芸術大学を受験する以外に道はないと考え、もし失敗した場合には1年浪人して教員採用試験を受けるつもりで芸大を受けることを決意しました。ただ、再入試の資金をお願いできない親には黙って受験いたしました。

東京芸術大学の試験は一次から三次まであり一次と二次は専攻楽器の実技試験、三次はピアノや学科の試験となります。二次試験に合格した時点で初めて母に芸大を受験していることを伝えました。

そして、芸大に合格したのですが、合格発表の際、現役の学生たちが歓喜している姿を横目に、自分は既に4年間を過ごしてきたため、「もうこの世界からは逃げられない」という思いが強かったのを覚えています。島根大学で過ごしていた頃は、練習に対して具体的な結果を求められていなかったのだと思います。そのため、ハッピーに過ごせたのです。もし結果を求められていたならば、決して楽しい時間にはならなかったでしょう。芸大の合格発表を見た際、「自分はもう、そうでない世界に足を踏み入れてしまったのだ」と感じました。

もちろん、合格を喜びましたし、4年間過ごしたことが無駄ではなかったと感じ、かつての仲間に対して面目が立ったという安堵感もありました。しかしそれ以上に「もうここから逃げられない」という感情の方が強く残っていたことを今でもよく覚えています。

2-C : 東京芸術大学時代

芸大に入学してからの生活は、資金的に非常に困難でした。奨学金もすぐには支給されず、入学して早い時期に生活費の援助を親にお願いする手紙を書いたことがあります。商売を営んでいた両親から使い古した千円札10枚が書留で送られてきたとき、親が1万円を送ることの大変さを思うと、そのお金をなかなか使うことができませんでした。そんな中、私が大学2年生の時、フジテレビ・文化放送の支援で運営されていた日本フィルハーモニー交響楽団というオーケストラがありましたが、当時様々な業界でストライキが行なわれていたような世相を反映して、その日本フィルハーモニー交響楽団でも労使紛争が起こり、その影響で日本フィルハーモニー交響楽団は解散、分裂して日本フィルハーモニー交響楽団と新日本フィルハーモニー交響楽団という2つのオーケストラに分かれてしまいました。多くの弦楽器奏者は日本フィルに残りまた多くの管楽器奏者は新日本フィルに移る状況でした。新日本フィルには弦楽器奏者が不足していたため、優秀な演奏者を輩出する桐朋学園大学の学生がエキストラとして参加し皆さんも良くご存知の小澤征爾さんとともに新日本フィルを支えました。

二つのオーケストラが分裂したのは、私が芸大の2年生に進級した時でしたが、そのような事情で私も両方のオーケストラからエキストラ出演の依頼を受けることとなりました。

それにより、プロのオーケストラで演奏する機会を多く得ましたが、そのことは大学の授業では得られない緊張感のある厳しさをもって様々なことを学ぶことが出来ました。

3 : オーケストラで演奏するうえで感じた様式に対する不安

☆心の中のモヤモヤ

そのようにオーケストラでの演奏経験を重ねることで、自分では一端の演奏家になったつもりでしたが、その一方でベートーヴェンやブラームスなどのオーケストラ作品を演奏しながら、自分自身の演奏に対して大きな不安を抱えていました。その不安を敢えて言葉にするならば、その曲の作曲された時代背景、またその時代の演奏様式を把握しないままに「ただ楽器を弾いている」自分に対する不安だったと思います。

しかしながら、自分自身に対するその疑念は、その曲の作曲された時代背景や演奏様式を学習することで解決することではありませんでした。

芸大の学生時代、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団が日本に演奏旅行で来た際、首席コントラバス奏者の先生が大学で特別レッスンを行って下さる機会が2～3度ありました。その先生の演奏は、技術的な上手さ以上に、大袈裟に言えばベルリンフィル首席奏者であるドイツ人の先生が、前の時代から繋がるドイツの音楽文化の延長線上に居て、コントラバスと言う楽器を演奏しているという凄さを感じていたのだと思います。それは学習をして答を得られるものでは無かったのです。

前段の「作曲された時代背景や演奏様式を把握しない不安」の答えはそこにあったと思います。クラシック音楽は、楽譜と言うツールで音の高さや長さを知ることによって演奏することができます。クラシック音楽はそういう面で合理性と普遍性を持っていると思います。

変な例えですが、私はベートーヴェンがどのような人物で、どのように生活をしたのか、また彼が話していた言葉（ドイツ語）など知らずに、ただ楽譜を音にして演奏していたに過ぎません。音の長さや高さからわかることで演奏は可能ですが、その曲に対する絶対的な理解を持たないまま弾いていることに、常にモヤモヤした感覚がありました。

そんな折、芸大4年生の時にドイツ政府の留学試験を受け、幸運にも国費留学の資格を得ました。この試験に合格したことは、自分が抱えているモヤモヤを解決するためには実際にドイツに行ってみなければ分からないと思っていた私には、何ものにも代えがたいものでした。

また、東京芸大が2度目の大学であることから、自分の生活を確立したいという焦りがあった私は芸大3年の終わりにオーケストラ（東京都交響楽団）の入団試験を受け、4年生ではオーケストラと学生生活を両立させていました。当時、東京都交響楽団での給料は月8万円ほどで、海外へ行くための航空券は片道30万円近くする状況でしたので、私費での渡独が無理な私には留学試験に合格したことは非常に大きな出来事でした。

ベルリンに留学し、初めてベルリンフィルハーモニー管弦楽団の演奏を聴いた時、オーケストラの演奏も、演奏を聴く聴衆も、そのホールで感じる全てのものが、日本で経験したものとは全く異なるものであることに衝撃を受けました。

ヨーロッパでは、クラシック音楽が宗教と共に発展してきました。バッハの音楽は、教会で神と繋がるための手段としてあったと思います。当時の人々は現代よりも教会に足を運ぶ頻度が高かったと思います。そのため、音楽は神と繋がるための重要なツールとして発展してきた歴史があります。

一方、日本では学校で音楽を学び（学習し）、音楽がなぜ存在するのかという根本的な意味を考えずに音楽を学んできたと思います。それが故に、オーケストラで演奏しても、作曲家の意図や背景を十分に理解できず、モヤモヤした感覚を抱えたまま演奏していた理由だったと思います。

☆留学生時代の気付き

ハンブルクからドイツに入り、リュネブルクという小さな町で3ヶ月間ドイツ語の勉強をしたあと、ベルリンへ向かいました。今でも、ハンブルク空港の美しい芝生の青さは、何年経っても心に残っています。

私がドイツにいた当時、ドイツは東西に分かれていました。第二次世界大戦後、連合国が西側（西ドイツ）をソ連が東側（東ドイツ）を支える体制が取られており、その中でベルリンは東ドイツの中にある特別な都市でした。ベルリン自体もさらに東西に分かれており、西ベルリンは東ドイツの中にある「陸の孤島」として存在していました。西ベルリンから東ベルリンへ行くことは可能でしたが、検問は非常に厳しく、車で行く場合、後部座席の下まで厳しく調べられました。駅には銃を構えた兵士が立っており、その目つきは、我々が想像するものとは全く異なり、撃つ覚悟を持った者たちがここにいるという緊迫した環境でした。これからご覧頂く映像はその様な時代の西ベルリンにあるベルリンフィルのフィルハーモニーザールでの映像であることを想像してご覧いただきたいと思います。

カラヤンという名をご存じだと思いますが、彼はその当時、世界のクラシック界を席卷する存在でした。音楽の歴史に名を残す多くの作曲家、そして演奏家もそうであったと思いますが、自分たちが理解できる領域を遥かにこえた感性、理解力、判断力を持って、それを衆目が納得のいく形で答を示すことができる人たちがいます。カラヤンもその一人でした。

ブラームス作曲の交響曲第1番の冒頭部分を少し見ていただきたいと思います。



参考：演奏動画が観られます

<https://www.youtube.com/watch?v=TNTywnny7WM>

交響曲の主部に入るまでの序奏をお聴き頂きました。これは1973年の演奏ですので当時演奏していた方々の多くは既に亡くなっていますが、彼らは前の時代から受け継いだ文化を体現し、カラヤンという卓越した人物のもとに集結した演奏だと思います。この様な演奏を聴いたとき、私はある意味では谷底に突き落とされたような気持ちになりました。自分も一応日本のオーケストラで演奏していたためオーケス

トラ奏者としての自負心の欠片は持っていましたが、そのような自分の思いは粉々に砕かれました。

日本の音楽大学で学んできたこともあり、コントラバスのソロ曲をそれなりに弾く技術は持っていたと思いますが、一緒にコントラバスを習うドイツ人学生が解放弦を弾く時、豊かな楽器の響きに彼らが持つ文化的な背景を感じずにはられませんでした。私たちは音符を見てそれを楽器で演奏するという形にとらわれていますが、なぜその音を出すのか、あるいは何のために楽器を演奏するのかという根本的な背景が欠けているのです。

4：音楽文化発祥の違い

4-a：日常生活にあった音楽文化

宗教、そして日常生活と音楽の関係について前段でお話をしましたが、コンサートホールでベルリンフィルを聴き、先生のご自宅でお稽古を受け、街を歩くことでそのことをさらに深く感じました。

ベルリンフィルが演奏していたフィルハーモニーザールにはさまざまな外国のオーケストラが訪れました。芸大でベルリンフィルの首席奏者の先生に特別レッスンをうけた時に感じた疑問は、実際にベルリンに来てその環境に身を置くことで、少しずつ理解できたように思いました。ベルリンフィルの先生を含め、彼らはドイツ語の音楽をドイツ人として演奏していることに気づきました。イタリアやフランスから来たオーケストラは、それぞれ異なる音楽の語法を持っています。

これは、言語を話す際に幼い頃からその国にいれば自然とネイティブに話せるのと同じことかと思えます。言葉と同様に、音楽も歴史の中でその土地に根ざしたものとして受け継がれていくのです。

4-b：学校で学習することから始まった音楽文化

日本においては、学習によって音楽を習得したことで、ある意味で勘違いが生じた部分が多かったのではないかと感じます。もちろん文明開化が謳われた明治時代から、滝廉太郎のように素晴らしい才能を持った作曲家が存在しましたし、その流れは山田耕筰などによって受け継がれましたが、私たちが現在感じている音楽文化というのは、ある意味で戦後に飛躍的に広がったと言えると思います。

戦後の日本で学校教育によって音楽が教えられましたが、しかし当然ながらそこには「なぜ音楽をやるのか」という必然性が欠けていたことはしかたのないことだと言えるでしょう。だからといって、全てが否定されるわけではありません。音楽に限らず、凡そ文化というものは、長い時間をかけて、そこに生きる人々の生活とともに醸成されるものです。

少し変わった例えかもしれませんが、時折目にする100年くらい前の写真や映像では、当時の人々が和服を着ているのが当然かと思えます。しかし100年という時間はそんなに昔の話ではありません。現在では、私たちは洋服を着ることが当たり前となり、そのことに違和感を感じることなく生活しています。これが、私が思う「文化」です。音楽も同じです。

実は、私の息子もコントラバスを弾いており現在オーケストラで演奏しております。私と彼とでは、見えている世界が異なることでしょう。このように世代を超えて築かれていくものこそが文化なのだと思えます。

5：クラシック音楽の持つ普遍性（合理性）による伝播力

5-a：全国27オーケストラが日本オーケストラ連盟に加盟

日本にはオーケストラ連盟という統括団体があり、正会員として加盟している団体が27あります（次頁の表参照）。ちょっと変わった考え方もかもしれませんが、これほどオーケストラが広まった理由は、交響曲に言葉がないからだと考えています。もし交響曲に、言葉がついていたら、日本でこれほどオーケストラ音楽が広く楽しまれることはなかったと思います。

言葉の壁が無く、楽譜という普遍的かつ合理的な形で表現されているため、私たちもそれを音にすることができるのです。例えば、ベートーヴェンの交響曲「運命」はドイツ人である作曲者ベートーヴェンの考え、意志とは異なった、日本人的な受け止め方をしても「鑑賞」することは成立します。また、いま例えに上げた交響曲「運命」は第1楽章から終曲の第4楽章まで平均的な演奏時間は30分くらいかかります。おそらく一度聴いただけでその曲の全てを理解することは無理だと思います。

しかし、興味を持って繰り返し聴くことで、その曲にたいする理解が深まり、聴く喜びが増幅して来ることと思えます。その積み重ねが、音楽文化の醸成だと思います。

演奏団体とその運営を支える行政、企業、篤志家そして、音楽を享受する聴衆によって、ゆっくりとではあっても、確実に日本の音楽文化が醸成されて行くのだと思えます。

お話が少し横道にそれますが、私は今、東京混声合唱団に所属しています。

音楽文化が宗教と密接に結びついて発展してきたことをお話させて頂きましたが、合唱音楽は特に宗教とは切り離せない音楽文化として発展してきましたので、日本の合唱文化はヨーロッパのそれとは、異なる発展の道を辿らざるを得ませんでした。

戦後70年にわたってほぼ宗教とは関係ない領域で素晴らしい日本の「詞」にクラシック音楽の旋律を付けることで合唱音楽文化が作られてきました。そして、日本の合唱文化は多くのアマチュア愛好家によって支えられてきたことも事実です。東京混声合唱団は給料制で運営される、日本で唯一のプロ合唱団として、生活に根ざした合唱文化の醸成に努めているところです。

北海道・東北	中部
1. 札幌交響楽団	1. 新潟交響楽団
2. 仙台フィルハーモニー管弦楽団	2. オークストラ・アンサンブル金沢
関東	3. セントラル愛知交響楽団
1. NHK交響楽団	4. 名古屋フィルハーモニー交響楽団
2. 読売日本交響楽団	近畿
3. 新日本フィルハーモニー交響楽団	1. 大阪フィルハーモニー交響楽団
4. 東京交響楽団	2. 関西フィルハーモニー管弦楽団
5. 東京フィルハーモニー交響楽団	3. 京都市交響楽団
6. 日本フィルハーモニー交響楽団	4. 兵庫芸術文化センター管弦楽団
7. 東京都交響楽団	5. 日本センチュリー交響楽団
8. 群馬交響楽団	6. 大阪交響楽団
9. 神奈川フィルハーモニー管弦楽団	中国・四国
10. 千葉交響楽団	1. 広島交響楽団
	九州
	1. 九州交響楽団

5-b:世界一流オーケストラにおけるメンバーの多国籍化

日本でも現在、多くの外国人が各地のオーケストラで演奏しています。しかし1970年代のベルリンフィルハーモニー管弦楽団にはヨーロッパ以外の国籍を持つ人はほとんどおらず、また女性も殆んどいませんでした。双璧のウィーンフィルハーモニー管弦楽団も男性中心の社会を維持しその土地の特有の文化やキャラクターを重んじていました。

1970年代のベルリンフィルはほぼヨーロッパ人で構成されていましたが、現在ベルリンフィルのコントラバスセクションではドイツ人の割合は50%を切っています。何故なら、オーケストラが優れた演奏技術を持った演奏家を求める時、その情報はインターネットを通じて世界中に広がることで、その目的が達成されます。しかし、そのことは反面、その土地特有の地域性が希薄になってくるという結果につながります。

ベネズエラでは音楽教育を通じて国民を非行から救うという国策があり、そこからベルリンフィルで活躍する演奏家も育ちました。現在、その演奏家はドイツ国籍を取得していますが、生まれはベネズエラです。

今では南米出身の人々が優れたクラシック音楽を演奏する時代になり、同様に、多くの日本人演奏家が、ベルリンフィルも含めて海外のオーケストラに所属しています。

このように、世の中はグローバル化が進み、かつての時代とは大きく変わりました。クラシック音楽の普遍性と合理性がその背景にあります。しかし同時に、前にも述べたように、その土地に根ざした音楽の特性が希薄になりつつあります。かつてのドイツのオーケストラは、より「ドイツ的」でした。たとえば、ドイツ・ライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団は悲しい戦争の影響を受け東ドイツ時代には多くの楽器がロシアに持ち去られ、彼らは貧しい楽器で演奏していました。それでもバツハから連なるライプツィヒの音楽文化を背負った響きがありました。現代では情報が世界中に行き渡ることによって、演奏技術は進歩するものの、その土地固有の文化は薄まる傾向にあると言えるでしょう。

日本においても、かつては地方のオーケストラにそれぞれの独自の色合いがありましたが、現在ではその特色が薄れ、技術面での向上が見られるようになっていきます。ドイツのオーケストラがフランスの音楽を演奏する機会が増えていることもその一例です。2019年、東京混声合唱団がフランスで演奏旅行を行い、フランスのオーケストラと共にマーラーの交響曲などドイツ音楽を演奏しました。このように、国境を越えた文化交流が進み、音楽の垣根は徐々になくなってきています。

日本でも同様に、広範に様々な情報が伝わることで地域性と言う文化の垣根が取り払われ、ある意味、均一化された上質な音楽文化へと発展するのかもしれませんが、しかし、生活の中で文化を喜びとして感じる人々がいてこそ、文化は成立するものです。生活と共にある音楽文化の変化について、少し大げさにお伝えしたかもしれませんが、これが皆さんにお伝えしたい最も重要なことです。

6：東日本大震災から教わった「音楽の持つ根源的な力（存在意義）」

そもそも音楽がなぜ在ったかということについて、私は最初に教会の音楽について話しましたが、もう一步踏み込んだ音楽が存在する根源的な意味、すなわち人が音楽をする意味は何であるかということをも自分自身で強く感じたのは、東日本大震災の時でした。

2011年3月11日、私は仙台フィルハーモニー管弦楽団の団員として仙台にいました。その日は、若い演奏者たちの伴奏を務める演奏会が予定されており、地震が発生したのは午後2時46分、午後3時からのリハーサルが始まる直前のことでした。

震災後の混乱の中で、仙台フィルのメンバーは自らも被災者でありながら、演奏家として何をなすべきかを考え、約2週間後の3月26日、団員たちの判断で、楽団の理事に僧籍を持つ方がいたので、その方のお寺に集まり、道路沿いに張り紙をして知らせるだけの告知方法でコンサートを開催しました。その時、道を通りがかった方も含めて、何人かの方が集まり演奏会をしましたが、お客として音楽を聴かれた方々は皆さんが極限状態にあった人々でした。それまでは泣くことさえも出来なかった人が、音楽を聴いて初めて涙を流し、心が少し安らぐ瞬間を迎えることが出来たのでした。

音楽が存在する理由、すなわち人が音楽をする根源的な意味は、まさにこの瞬間にあるのだと思います。

最後に、私がまったく別な視点から、コントラバスを演奏することを考えた映像をご覧頂きたいと思います。



宗教と音楽のお話をさせて頂きましたが、震災後に仙台でお寺のご住職（尼僧）と親しくなり、色々と悩みながらも40年近く弾いてきたコントラバスをお経と一緒に演奏させて頂きたい旨を伝え、その機会を頂きました。

私にはお経の意味を理解する能力はありませんが、お寺とお経は自分が生まれて常に意識の中に在ったもので、その存在にまったく疑いのないものとして心に響くものでした。お経を唱えていただきながら、私自身が感じるままに楽器を弾かせていただくという時間を持つことができたとき、これまでに体験したことのない世界に昇華させて頂けました。この経験は、私が40年近く弾いてきた楽器と、お経が一体となる瞬間を体験できた非常に貴重なものでした。その様子を少しでも見ていただければと思います。

参考：右 URL で会場で上映した動画がみられます <https://youtu.be/kbE67GKbGLM>

7：音楽と共存する生活の薦め

本日は、最後まで聞いていただきありがとうございました。「生活とともにある音楽文化」という演題で長々とお話をさせて頂きましたが、クラシック音楽に限らず、皆さんの生活の中でジャンルを問わず、音楽が少しでも皆さんの生活を豊にすることを願って拙い話を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

8：賛助出演 佐倉男声合唱団 男声合唱曲「言葉は」 指揮 村上満志 全員合唱 「ふるさと」



【質疑応答】

Q1：高齢者が音楽に親しんでいると認知症予防になると聞いていますが何か情報はありますか

A1：私は専門家ではありませんが、何かしら目的を持って生活し、自分の時間を持つことは重要だと思います。それが予防に効果があるかどうかは分かりませんが、やはり歌うことや、音符を読み取ろうとすること、そしてその世界に没頭しようとする事自体が大切だと考えます。予防効果の有無はさておき、これらの行為には大きな意味があると思います。

Q2：先生にとって人生で一番のコントラバスの魅力はなんでしょう。

A2：奥様はいらっしゃいますか？<質問者回答 YES>。そのようなものと存じます。深い魅力があり、私も同じでございます。出会ってしまったのです。先ほど申し上げました通り、私は幼少期に音楽教育を受けておらず、楽器を演奏する際に非常に不自由を感じておりました。才能豊かな方々も多くおり、不適切な言い方かもしれませんが、そういった方々と戦ってきた部分もあると存じます。コントラバスとは、言葉を越えた特別な関係であると感じています。

Q3：お経とコントラバスは素晴らしくメロディーが素敵で聞き入ってしまったのですが、先生はどのような感じで即興演奏されたのでしょうか

A3：即興のつもりではありましたが、私は音楽的に即座に音が浮かんでくる能力を持ち合わせていないため、ある程度自分で楽譜を作成しました。ご住職が唱えられているお経の意味は理解できないのですが、そのまま自分が感じるままにゆえ、粛々と音を出しているという状態でした。本来であれば、その場で瞬時に音が浮かび、即興的に演奏できるのが理想ですが、その意図だけは持って臨んでおりました。したがって、何か固定された作品をお経に合わせて演奏するという考え方ではありませんでした。

以上

村上 満志（むらかみ みつし）先生のプロフィール

1948年 生まれ、広島県出身

1967年 島根大学教育学部特別教科（音楽）教員養成課程入学

1971年 島根大学卒業と同時に、東京芸術大学音楽学部器楽科（コントラバス）入学

1974年 東京芸術大学4年在学中に東京都交響楽団に入団

1975年 東京芸術大学卒業後、ドイツ（当時西ドイツ）政府給費留学生（DAAD）として渡独、ベルリンフィル首席コントラバス奏者ライナー・ツェパリッツ教授に師事

1976年 帰国以後、オーケストラのコントラバス奏者としての演奏活動を中心に室内楽、またコントラバス・ソロ奏者として活動

1985年 東京都交響楽団コントラバス首席奏者に就任、また昭和音楽大学、愛知県立芸術大学、名古屋音楽大学で後進の指導にあたる

2001年 指揮者外山雄三氏の要請で仙台フィルハーモニー管弦楽団首席コントラバス奏者に就任

2012年 東日本大震災後、楽団の要請を受けて仙台フィルハーモニー管弦楽団演奏事業部長に就任

2017年 指揮者山田和樹氏の要請を受けて東京混声合唱団事務局長に就任
現在、東京混声合唱団 参与